



高砂橋(昭和29年)

左からの流れが六郷用水。  
中央上部から西嶺町を流れる湧  
水が合流する。

## 水と緑の六郷用水を

三橋 昭

平成二五年十一月、『大田区まちなか・まちかど遺産／六郷用水』と題された講座が開かれました。プレゼンターは当時大田区立郷土博物館学芸員の北村敏さんです。ちょうど、郷土博物館で同タイトルの特別展を担当していたことから、お話しを伺ったものです。北村さんは現在の仕事に忙しく、原稿を書く余裕がないとのこと、私が六郷用水の概略を説明させていただきます。

天正一八年(一五九〇)、小田原北条氏を滅ぼした徳川家康は豊臣秀吉によって、三河から関東へ国替えを命じられます。家康は江戸に腰を据える事を念頭に、将来を見越し江戸の基盤整備を始めます。

二つの大きな事業として、まずは物流の拠点としての運河の整備を行います。当時物資の運搬は、船が主体の水運に頼っていました。そして人口増を見越し、新田開発を積極的に進めます。そのような経緯で開削されたのが六郷用水です。当時の大田区の平野部分は六郷領であり、平らな土地なので稲作には適していましたが、水利の便が悪くほとんど荒地と湿地帯でした。豊富な水さえ供給できれば、

六郷領は豊かな農村に生まれ変わります。そのために考えられたのが、多摩川中流から取水する灌漑水路を造ることでした。

家康の命を受け工事の指揮を取ったのは、小泉次大夫です。次大夫は元今川家の家臣ですが、徳川家康に従って江戸に来ました。河川の制御を得意とする一族出身のため、家康に六郷用水と二ヶ領用水開削を進言したとされています。二ヶ領用水とは多摩川の対岸、川崎側の稲毛領と川崎領の二つの領地に水を供給したことから「二ヶ領用水」と呼ばれている用水路です。どちらもそれぞれの領地に住む農民を徴用して、開削工事は六郷用水側と二ヶ領用水側とで交互に行なわれました。

まずは測量。次大夫は多摩川と台地部分が接近している多摩川浅間神社付近から取水できないか考えたことでしょうか。ただこの地点からの取水は多摩川の水位が低く、当時の技術では汲み上げて取水することが難しく、断念します。そして、最適の取水口として選んだのは、ここから約一〇キロ上流の狛江市和泉地点です。

多摩川沿いには河岸段丘としての国分寺崖線が続いています。六郷用水はこの崖線のすそ野を削るように少しでも高い位置をキープしながら開削されたのです。暴れ川と呼ばれていた多摩川は大雨ごとに氾濫を繰り返しており、高い位置に造らないと、低い位置では氾濫に飲み込まれてしまう恐れがあるからです。

狛江市和泉の標高はおよそ二六m。南北引き分けと呼ばれる地点（一本の本流が池上、大森方面の北堀と蒲田、糺谷方面の南堀に分かれる）が標高約八m。この勾配差を利用し、更なる末端までも自然流下させ用水は流れてきました。そして各村々に小堀が張り巡られていきます。設計に二年もの月日を費やしたとはいえ、まだ近代測量術が日本に入ってくる前の時代、その工事の正確さは驚嘆に値します。一説には夜間提灯を点してその高低差を測ったとか、線香の明かりを頼りに計ったとか様々な説がありますが、記録が残っていないため、本当のところはどうだったのか、分かりません。

徳川幕府開府以前の慶長二年（一五九七）測量開始した六郷用水の工事は慶長一六年（一六一一）の完了まで足掛け一四年もの大工事でした。実際に工事を担当したのは六郷領の村々の農民です。人数も道具も限られていたことでしょう。有名な玉川上水はわずか一年で完成していますが、その工期の違いはいったい何だったのでしょうか？

江戸幕府の成立は慶長八年（一六〇三）、その七年後に六郷用水は完成していますが、玉川上水の完成は承応二年（一六五三）で、徳川幕府成立五〇年後であり、幕府も安定し、財力もあることから五千両の資金を投入しての一大土木事業なのです。（もともと、五千両では足りなかったようです）従って工事人足を多数投入して、一年で完成させました。とあるデータを元に自分が試算したところ、一日

三〇〇人程度の人足が働いていないと、一年程での完成は無理な計算になります。

六郷用水が出来てどの程度田んぼの面積が広がったのか、実はそれ以前の記録が残されておらず分からないのですが、宝暦二年（一七五二）以降の記録を見ると確実に増えていることがわかります。そしてピークは明治三二年（一八九八）です。その時の面積は一〇二二町三七畝二四歩。（一町はおよそ一ヘクタール）現大田区区域は、この頃までがさほどの変化も無く緩やかに推移した三〇〇年、一面田んぼが広がるのどかな農村でした。そしてその後、激変の一〇〇年を迎えることになります。

大森近辺を中心に、宅地化が進んできているとは言え、まだまだ田んぼの面積が旧六郷領の総面積の半分以上を占めていた大正末期、急激な宅地化が進みます。その要因は私鉄網が整備され、山手線の内側まで通勤圏になったこと。村々では耕地整理も進み、宅地の提供が進んだこと、また、黒澤工場しかり、新潟鐵工しかり、高砂香料等々大正時代に入ると、大きな工場が陸続と進出してきました。そして何より、大きな変化をもたらしたのは、関東大震災です。壊滅的被害を受けた下町などから、比較的被害の少なかった大田区エリアに、家を失った人達が続々移住してきました、一気に宅地化が進みました。

その結果田んぼが激減し、灌漑用水としての役目を終えた六郷用水は、生活排水路として一気にドブと化します。

その後、隅々まで張り巡らされていた六郷用水は、これ幸いとばかりに下水整備のため大小の土管を埋められ、下水路網となり、ごく一部を除き暗渠化されてしまいました。そして、あるところでは植え込みに、あるところでは歩道に姿を変え現在に至っています。よく気をつけて街を散策すると、片側だけに植込みがある道が結構目に付きます。そのほとんどは、姿を変えた六郷用水路跡と考えてほぼ間違いはないでしょう。

紙面の都合もあるので、蒲田周辺の変化に絞って辿ってみましょう。のどかな農村地帯であった蒲田には大正初め頃より大型の工場が進出し、一気に都市化が進みます。そんな企業の一つ、松竹キネマ蒲田撮影所が出来たのは大正九年(一九二〇)、蒲田の街は突然、女優、男優が闊歩する華やかな街になりました。毎週土曜日に開かれた縁日は、遠くから俳優の姿を求めてやって来る人も多く、とても賑わったそうです。

その撮影所には松竹橋という橋を渡らないと入れません。この橋の下を流れていたのが六郷用水の主要な支流、逆(さかさ)川です。元を辿ればその流れは、現在区役所になっている建物の中央を貫き、JR線路の下を流れ、東急蒲田駅の脇を流れる御園堀から続いている流れです。この御園堀は六郷用水南堀から枝分かれた支流の一つになります。

現在アロマスクエアの広場植込みの一角に松竹橋(映画「キネマの天地」のセットだったもの)の標柱が設置されています。映画「キネマの天地」完成記念に、松竹から寄贈されたものです。「キネマの天地」はご覧になった方も多いと思いますが、松竹蒲田撮影所に働く若者の人間模様を生き生きと描いた名作です。標柱が設置されている場所は、ほぼ以前松竹橋が架かっていた場所で、区役所方面を眺めると建物正面が見え、反対側は現在遊歩道となっているさかさ川通りへと繋がり、その先で呑川へと落ち込みます。逆川という名前は増水時の呑川から逆流することがあったからでしょうか。

蒲田大通りから蒲田八幡へと向かうポプラード2が逆川と交差する地点に架かっていたのが蒲田橋です。「蒲田」という名前がこの橋に付けられたのは重要です。かつて蒲田町役場や、蒲田区の区役所も近くに設けられこの一帯が蒲田の中心地であることから、橋名が「蒲田橋」と付けられたことと思われます。昭和に造られた蒲田橋の親柱が二つ、呑川の側壁添いに移築保存されています。余談ですが、この蒲田橋がどの程度の規模の橋であったのかを想像できるように、さかさ川通りを整備したときに四つの真鍮製?アンカーポイントが打ち込まれています。そのため、そのアンカーポイントを見つけると、橋の幅と長さが想像できます。

現在、六郷用水が開渠となっているのは沼部の復元水路

と田園調布から世田谷区等々力、岡本方面を流れる丸子川（現在は多摩川の支流扱いで一級河川となり、名前も丸子川となっている）のみです。ただ水の確保が難しいとは言え、今後水路となつて復活出来そうな場所もいくつかあります。復元水路があちこちに来れることで、歴史に裏打ちされた水と緑に包まれたいこいの空間が増えることを切に願います。



丸子橋架橋のため、  
盛り土された中原街道部分に流れていた六郷用水路  
上は現在、下は昭和29年の写真